

# 算命学中庸

## 【初年】 25回目

25回目の授業はこのページからです。

授業科目           【自然と生活】

【初年】 25回目 【自然と生活】 01

中国の古き昔は、算命学の考え方が伝えられていまして、生活習慣として当たり前のように、生活のなかに取り入れられている部分がありました。

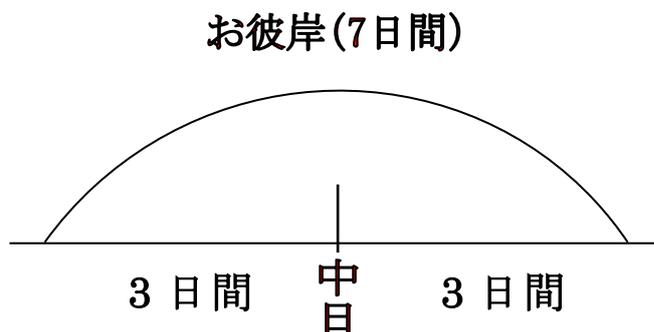
しかしながら、文化大革命が起こる以前の生活環境と、革命の<sup>あと</sup>後では、昔からの風習がかなり変わってしまったようです。

日本においては、季節の節目における習慣や行事として、風習の名残を、現在でも当たり前のように行っていることは数多くあります。

〔たとえば〕「暑さ寒さも彼岸まで」という言葉がありますが、お彼岸を境にして、秋の気配とともに、だんだんと寒さが増してきます。

日本の仏教で「お彼岸」といっているのは、春分の日と秋分の日を〔中日〕として、前後七日間をいいます。

お彼岸 ⇒ 春分の日と秋分の日を中日として前後 7 日間



赤道というのは、地球の自転の軌道です。

つまり、地の軌道です。

赤道 ⇒ 地の軌道

黄道こうどうは太陽や惑星が通る道ですから、天きどうの軌道です。

**黄道 ⇒ 天の軌道**

「春分点しゅんぶんてん」や「秋分点しゅうぶんてん」は、赤道と黄道の交差するところです。つまり〔天の軌道〕と〔地の軌道〕の接点をいいます。

**赤道と黄道の接点 ⇒ 春分点・秋分点**

春分の日、秋分の日は、天と地が一体になりますので死者の霊魂が、あの世から地球に帰って来ると考えています。この期間を日本の仏教ではお彼岸とって、仏事とかお墓参りをして、ご先祖様の霊なぐさを慰める行事をするわけです。

お彼岸の七日間『七』というのは、人が亡くなってからの初七日、その七倍の四十九日とか、赤ちゃんが産まれてからのお七夜、または、七・五・三のお祝いの行事にみられる数は『七』です。

この『七』は、太陽と月と五惑星の数を示すものです。現代のカレンダーの曜日〔日 月 火 水 木 金 土〕この1週間の七日は、五惑星に太陽と月を加えた数といえます。

洋の東西を問わず、「七曜<sup>しちよう</sup>」という考え方は、古くからあったようです。

古代中国では、3000年位昔からあったものです。

これは（木火土金水）の五行に、太陽と月を加えまして、七曜日としたわけです。

**七曜 ⇒ 木星・火星・土星・金星・水星・太陽・月**

☞ 仏教の四十九日——という死後の世界については、算命学も、おなじように考えている部分があります。

そのことは、宿命にある星の意味合いを勉強するときに出てきます。

人が亡くなった後に、靈魂がさ迷う空間を「宇宙空間」と位置づけて、「木星・火星・土星・金星・水星・太陽・月」の「七曜」を、魂が一日ずつ巡<sup>めぐ</sup>りまわり、それを七回繰り返して、魂が成仏すると考えたのです。

それにかかる日数は（ $7 \times 7 = 49$ ）として、四十九日間は、人の魂が宇宙を駆け巡っている期間です。

現代でも死んだ後<sup>のち</sup>には、49日経過<sup>けいか</sup>してから「お骨」を「お墓」に埋葬<sup>かんれい</sup>する慣例は、そういう考え方が根底に

あるわけですよ。

「四十九日」の間は、魂が宇宙を巡行しているために、お墓に埋葬しても、魂はお墓には宿らない、四十九日を過ぎれば、あの世に安定して成仏できると考えまして、その象徴として、お墓に埋葬するのです。

算命学の考え方は、このように生活習慣のなかに数多く入っています。

☞ 「高松塚古墳」に描かれている神獣——朱雀（すざく）

玄武（げんぶ） 白虎（びやっこ） 青龍（せいりゅう） 騰蛇（とうだ）

この五神獣ごしんじゅうは、これから勉強のなかに出てきますが、算命学は、運勢かたの型を表すときにつかっていくようになります。

☞ さきほど「お盆」のことがでてきましたので、端的たんてきにお盆の意味合いをご説明します。

お釈迦様（仏陀）にモンガラナーという弟子がいました。

日本では目連もくれんとして紹介されています。

モンガラナーが天眼てんがん〔悟りの一つ〕を開いたときに、自分の母親は、死後の世界のどこにいるのか……と探した

ところ、母は火炎地獄にいたそうです。

モンガラナーは、せめて母親に水を差し上げたいとして、水を差し上げるのですが、水は火炎と化<sup>か</sup>してしまうのです。

そのことをブッタに伝えたところ、つぎのように諭<sup>さと</sup>したそうです。

そなたの母は、生前、自分のことだけしか考えないで、気の毒な者たちに、なにかを分け与えたことが無く、つねに、自分を中心として、人びとに慈愛を与えることなく、他人<sup>ひと</sup>からの布施<sup>ふせ</sup>ばかりを望んでいた。

自分の意思にそぐわぬ者に対しては、バラモン階級であることを笠<sup>かさ</sup>に着<sup>き</sup>て、シュドラー（奴隷）たちに、きびしい行為をしてきた。

他<sup>た</sup>を労<sup>いたわ</sup>ることなく、思いやることなく、自らの心がさせた行いの結果として、火炎地獄に墮ちているのだ。

モンガラナー、そなたは母の代わりになって、困っている人々にできるだけ<sup>だけ</sup>の布施をしなさい。

そなたの母はその行為をあ<sup>あ</sup>の世から見て、自分の人生の誤りを悟るだろう。

そなたの慈悲が母を救うことになる。

そのようにブッタはモンガラナーにいったのです。  
モンガラナーは、「ブッタのお言葉のとおり、母のため、わたしの修行のために、悩める衆生に供養します」と  
ブッタに誓い、その後、日を定めて、母親のために、  
貧乏な人々や病める人々に、慈愛の布施を実際の行為  
としておこなっていくのです。

そうしますと、本来の「お盆」の目的は、死んであの世  
へ去った人が、この世に生存していたときに忘れてし  
まった『布施の行為』を、現在、この世に生存する子  
孫が、その人に代わって行為することなのです

高橋信次氏の著書より抜粋。

ところが、習慣というものは、永い年月の過程におい  
て変えられ、本筋から遠ざかってしまうものです。

これらの逸話は、ネットのウィキペディアにも載っていますよ。

【初年】 25回目【自然と生活】 **終わります**

つぎの授業 ⇒ 【初年】 26回目【五行諸類考】